第3種郵便物認可

京都新聞 2017.12.20

文化

古都の深層

―秘められた場の歴史

高木 博志

8 泉涌寺

明治にも残った皇室の仏教信仰

泉涌寺の霊明殿の裏には、後水尾天皇から仁孝天皇までの月輪陵・後月輪陵、高さ5㍍前後の九重石塔が林立する。江戸時代の泉涌寺は、鎌倉時代の四条天皇ほか江戸時代の歴代天皇や皇族の墓所を有する、皇室の菩提寺であった。これら仏式の墓群は、明治はじめの皇室の神仏分離により、泉涌寺から切り離され、宮内省が管理する皇霊が宿る神式の陵墓へと転換していった。

しかし日頃、京都御所で仏教の法要で先祖を供養し、泉涌寺で仏葬を行ってきた天皇や皇后、皇族たちが、明治2（1869）年に東京へ遷都したからといって、仏教信仰を捨て去ることができたのか？

明治23（1890）年12月31日付、皇后宮大夫・香川敬三から泉涌寺宛の書状がのこされている。光格天皇に由緒をもつ阿弥陀仏は、皇室の神仏分離後、宮中から恭明宮（現在の京都国立博物館の場所）をへて泉涌寺に安置されていたが、昭憲皇后（明治天皇の后）の希望により、東京の皇居に移された。念持仏として信仰する皇后が「御満足」であるとの礼状である。これに先立ち、明治10年には泉涌寺から文殊菩薩が東京の宮中に差し出されていた。ほかにも、明治28年に皇太子明宮（のちの大正天皇）が危篤になったとき、ベルツの西洋医学も効かず、明治天皇の生母中山慶子や東宮職は病気平癒のため不動明王供・焔摩天供の祈祷を泉涌寺に命じた。冥界をつかさどる焔摩法王は、人の生死にかかわる。祈祷された守札や明宮の御衣はその後、皇居の東宮御殿に祭られて、中山慶子や高位高官が病気平癒を日々祈った。

また明治31年（1898）に、山階宮晃親王は遺言で仏葬を願ったが、枢密院が許さない。しかし明治天皇は晃親王の「衷情」を察して、内々に泉涌寺での仏葬を許した。京都生まれの多くの皇族は、神式では成仏できないと思っただろう。

東京の皇室は神道一色のようにみえ、明治初年の神仏分離以降、宮中から仏教的な要素は払拭されたかのようだ。しかし東京に移った明治期の皇室において、公には国家神道で慰霊（皇霊祭祀）するが、私的には平安時代以来の仏教信仰が生きつづけ、京都の泉涌寺との深いかかわりは続いた。

（京都大人文科学研究所所長）

泉涌寺境内と背後の陵墓群

焔摩天像（いずれも泉涌寺提供）